

米・水・田んぼ

三世代前、日本人の大部分が農民だったというが、私にはイナゴとりの記憶くらいしかない。子どもの頃近くの稲刈り前の乾いた田んぼにはイナゴが大量に跳ね回っていた。袋いっぱい持ち帰ると母が佃煮にしてくれておやつになった。

義父から田んぼを引き継いだ時「作るより買った方が安いよ」との近隣の助言もあったが、そう割り切ることもできなかった。米作りといっても田植えと稲刈りは人頼みで水の管理をするだけだが「コメは毎年違う」と言っていた義父の言葉が年々身にしみる。

米作りを始めて間もなく、これまで素通りしていたことが2つ腑に落ちた。一つは所々にあるコンクリートの枡（60cm×60cm程度）である。某村営住宅の設計の時に敷地の隅にあって役場の人たちは「水替え用ね」と口にした、あれは用水路の流路を替えるものだを知った。他にも水を汲み上げる仕掛けなどもあって感心させられる。



用水路の流路を変える枡

もう一つは、団地に住んでいた頃、初夏の早朝、突然の物音で目覚めた時のこと。ガラガラと道具を引きずるような音と共に、「だから団地になんか土地を売るなって言ったんだ」と人々の話し声がした。これは田んぼに水を引く前の用水路の掃除だったと知った。秋の落ち葉・運ばれた泥・ゴミなどを取り除かないと水がスムーズに流れない。用水路のゴミの多さに閉口した農家の人々が団地に土地を売ったことを憂いていたのだ。いま私の住む地域では春の用水路掃除のほかに秋に「水神講」というのを行い稲作をしない人々も含めて水路の掃除を行う。

私の米作りは稲刈りから始まった。夫が植えた稲を刈る算段をする、水を抜けばいい。稲刈りの数週間前に排水口を開けたので表面は乾いた。が、当日はなぜかぬかるんで大変な稲刈りになってしまった。実はこの田には暗渠の排水口もあったことを知らなかった。



暗渠の排水用パイプ栓

水は多すぎても少なすぎてもNGで、それが収量を大きく左右する。除草剤は近隣の約1/3、その効果も水量や風に左右される。土用の頃いったん田んぼを干すことで根がよく張り倒伏を防ぐと言われるが、干したあと守備よく水がはいらないと収量はガタ減りする。それを危惧して干さないと実際稲が倒れてしまう。

富山和子『日本の米』(中公新書)には一面に水をたたえる田んぼについて書かれている。

「一枚一枚の水田に水を張り、どの水田にはどこから水を入れ、どこに落とすかという事を綿密に計算し、全体に行きわたらせるようにする。…それを何十枚、何百枚、いや平野一面に行っていく。私は水田を見るといつも不思議でならないのだ。いったいどのような技術と知恵が秘められているのだろうか。」
そして、「まさに『降れば洪水、照れば渇水』の…くるくると変わる自然を相手に、きめ細かく根気よくつきあってきたのが日本の稲作農民だった…日本人のきめ細かさ、辛抱強い仕事ぶりはそのようにして太古から、米によって養われてきた」とも。

2024年から米不足と価格高騰で瀕死の日本の米、この状況で長野市では田んぼが荒れているという理由で大規模に畑に転用し法人に営農させようという事業が強引に進められている。所々耕作されていない田んぼがあるとはいえ田植え後の美しい風景、秋の一面の黄金色が広大なレタス畑に変わるといふ。猛暑の松代でのレタス栽培は農業を大量に使わざるを得ないのではないだろうか。2019年には大きな洪水被害があったが、畑への転用による保水力の検討すら市はしていないらしい。

再度、富山和子『日本の米』には
山奥の水田について「水田面積の何倍もの表面積の石垣の畦が丁寧に築かれている…その石の一個とて私には持てない」と山村の人々の労働に思いを馳せている。そして日本は木と土の文化だといわれるが石の文化、石の技術の成果だと語り、次の一文を載せている。

山の斜面から石を掘り出して平らな水田を作り、
その石を積み上げて石の畔を築く。
おかげで水は流されず、土や肥料の流出も防げ、
山崩れからも守られる。
日本の農地とは、何と労働の投じられた芸術品だろう。
日本の石垣水田の総延長は万里の長城の比ではない。
そして、日本人が農業を止めたとき、
山は崩れ落ちる。

米農家の平均年齢が68歳とか70歳とか言われて10年後を危ぶむ声があるが、米作りは年金受給者が担っているという現実もあるので、いじめられながらも平均年齢を維持して細々と続く気もする。

(2025年9月)